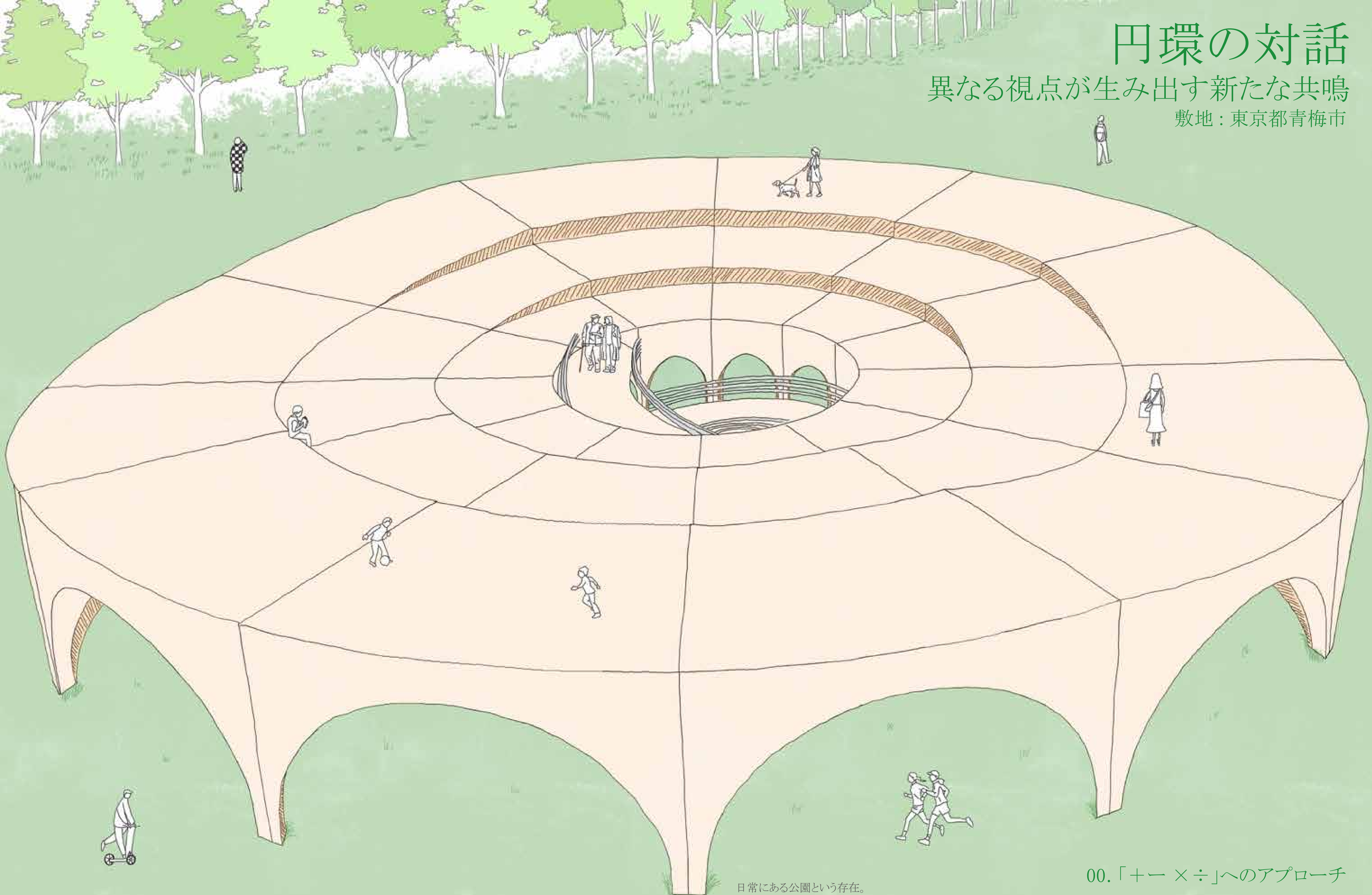


円環の対話

異なる視点が生み出す新たな共鳴

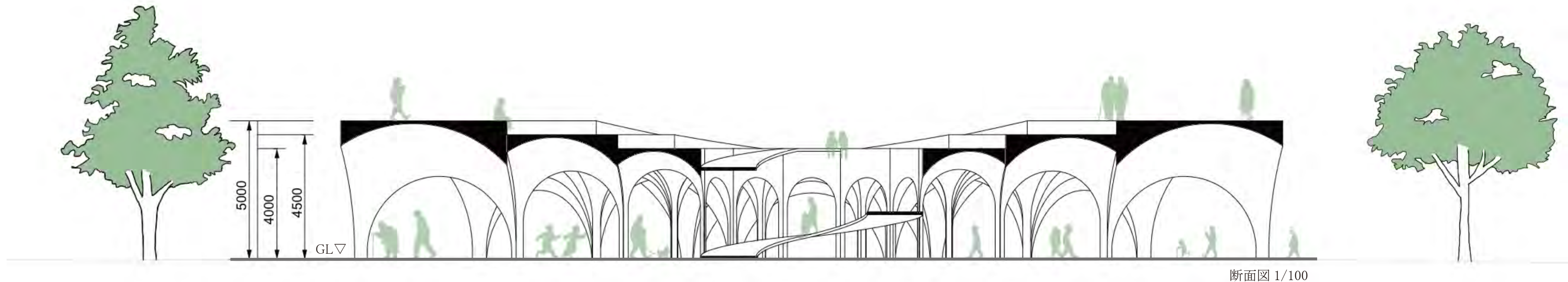
敷地：東京都青梅市



00.「+ × ÷」へのアプローチ

日常にある公園という存在。

それは公衆のための憩いの場として目的によらず公開されている空間である。目的がない人や通過するだけの人もいるかもしれない。人々が1つの空間を共有し合うことで新たな価値観を生み出すこと、趣味や生活から世代による違いまで垣根を越えた交流を促すこと。人の結びつきにおける四則演算を、人の手により作り出す建築を私たちは提案する。

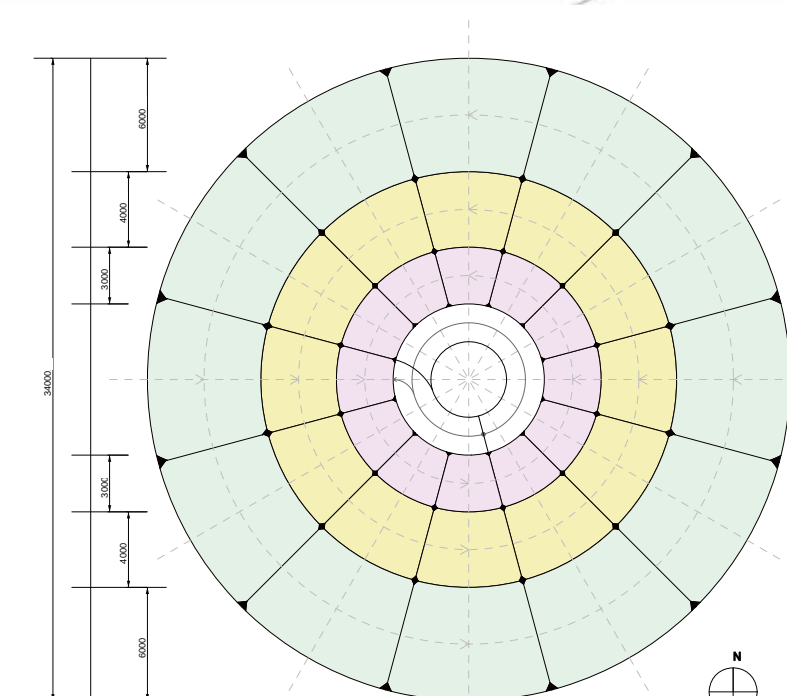


断面図 1/100

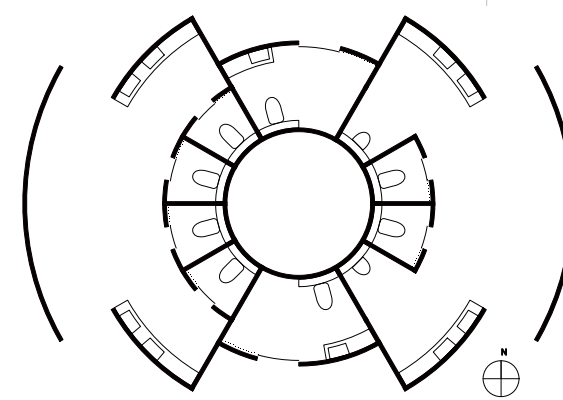
01. 図面詳細



敷地平面図 1/1600



平面図 1/400



トイレ平面図 1/200



トイレ断面図 1/200

02. 敷地設定



世代別の交流を生む施設をつくるに当たり、各世代が生活しており学生、若者からその親、またその親世代まで幅広く住んでいる**ベッドタウン**を選んだ。青梅市は西東京に位置し三方山をはじめとした山々に面しているため**生活と自然が交わりやすい**。また、休日には地元内での近所づきあいや習い事の往復路、知り合いとの談話をする場所の提供に繋がる。

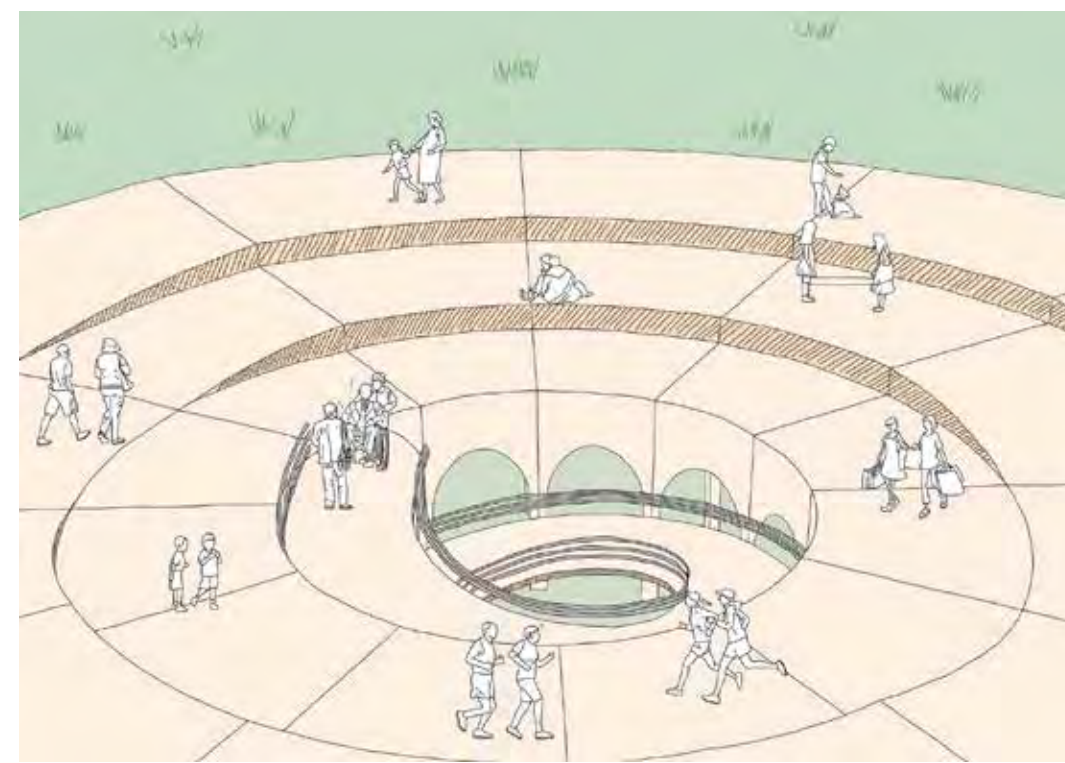


“ベッドタウン区域の核家族化”

ベッドタウン区画には多くの世帯が住んでいる。現在は多様な家族構成がみられ、拡大家族や大家族から“核家族社会”へと変容している。そこで問題視され始めたのが、地域内での**孤立化**、疎外感からくる**不安**だ。人々が交流、または空間を共有する場を提供することで、都心化により生じた社会問題への解決策を提案する。



03. 価値観の相互作用

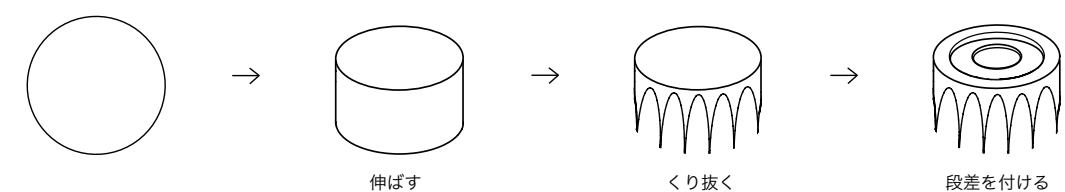


3-1. 活動の循環を示す円

人々の知識を増やす、遮断する、混ぜ合わせる、いれた知識を自分なりに解釈してまた人に分配する。サークル状の空間がその**操作を循環**させる。

3-2. 波紋が広がる屋上

「波紋が広がる」「波紋を呼ぶ」「波紋を投じる」「波紋」は何もない空間に生まれ**静かに、しかし鮮明に**受け手に影響を与えていく。人々が感じたことを、また**新たなアクションに繋げる**ことで波紋の連鎖が生まれ共振が続いていく。



3-3. 視線が交差する境界線

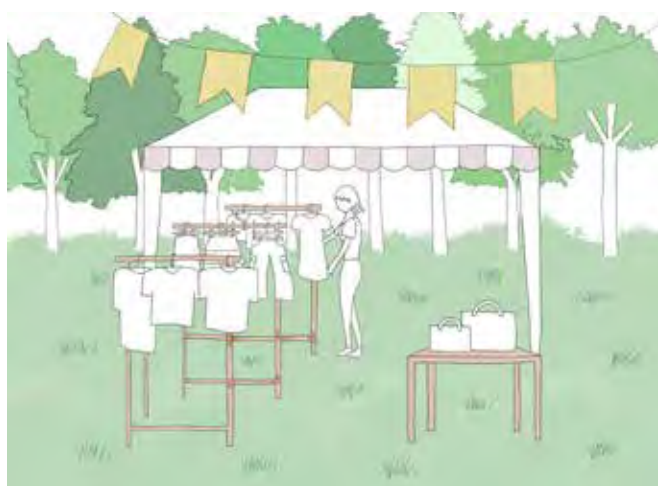
建物には部屋という**区切りが存在しない**。部屋という区切りがあることで、同世代が集まる空間が無意識的に生まれてしまう。同様に建物に階層をもうけスペースを作ることは情報の遮断に繋がってしまう。この空間では、いる人、ある物、行われていることを仕切らず受動的に感じる事ができる。

04. 自然と人の関わり



公園は、年代も性別も異なる人々が異なる目的のもとに異なる価値観をもって集まってくる、都市のなかで唯一の特徴をもつ場所である。

そして公園を訪れることは、日常生活で自然を身近に感じるための最も簡単な方法といえる。人々の生活が行われる空間と生命体の息吹く空間“都市”と“自然”を緩やかにつなげ、見る者へ構造体の説得力を持たせたいと考えた。



木は人のように成長していく。そこに人は親近感と暖かみを感じ空間の心地よさに繋がる。自然のなかで木々が成長し、上へ横へと幹を伸ばしていく様をアーチ形状のカーブとした。また建物からは壁面を一切なくし青梅市の豊富な自然と建築内部との**境界が曖昧**になる。

アーチ構造や交差形状は、古代ローマのコロッセオから始まり、ゴシック建築のリブヴォールトや日本でも多摩美術大学の八王子キャンパス図書館、由布市ツーリストインフォメーションセンターなどに見られる。壁を作らずに屋上となるコミュニティスペースを作るにあたり、上からの荷重を柱へ分散させる構造として現在の形状となっている。

